

『赤と黒』の校訂とレナール夫人像：解釈と受容の問題

高木, 信宏
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/2203045>

出版情報：Stella. 37, pp.133-148, 2018-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



『赤と黒』の校訂とレナール夫人像

——解釈と受容の問題——

高 木 信 宏

『赤と黒』のテキストについては、以前より気になっていたことがある。1973年刊行のガルニエ新版において校訂者ピエール＝ジョルジュ・カステックスは本文中の一語を訂正したのだが、はたしてそれは正しい判断であったのだろうかという疑念である。『人間喜劇』のプレイアッド新版を監修したバルザック研究の大家であり、しかも手堅い実証に裏打ちされたその『赤と黒』の校訂版に対する信頼は今もおまったく揺るがないので、この問題について突き詰めて考えぬまま現在にいたったわけだが、しかし一個の形容詞とはいえ主要人物の性格設定にかかわる言葉であるだけに、疑問がこのさき念頭を去ることもありそうになく、それにまた作品の受容史という観点からも興味深い側面を有しているので、本稿において修正の当否について一考する次第である。

＊

カステックスが修正したのは、第1部・第3章に配された次の文である——

M^{me} de Rênal, fort timide, et d'un caractère en apparence fort *inégal*, était surtout choquée du mouvement continu et des éclats de voix de M. Valenod.¹⁾ [イタリック体が問題の箇所]

1830年の『赤と黒』公刊以降、諸版のテキストではこのように「*inégal*」の語が置かれてきたが、カステックスはこの語が他の箇所で示されるレナール夫人の性格的な特徴——「彼女はけっして不満を口にすることはなかった」、「見かけはかくも優しく慎ましい」——にそぐわないと説き、これは初版印刷時の誤植であると判じて、対義語の「*égal*」に置き換えたのである²⁾。

一見すると取るに足らない訂正のようだが、カステックスによる『赤と黒』の厳密な校訂においてはきわめて異例なものといっている。草稿や原稿、校正刷などとの照合ができないという悪条件下で、テキストの情報のみにもとづき自らの思い描く人物像に照らして、一語の妥当性を判断する行為の孕む危うさは、彼自身が最もよく承知していたにちががなく、それだけにこの訂正には慎重を期したうえでの大胆な決断を見ないわけにはいかない。

ガルニエ新版以後、『赤と黒』の本文を校合したスタンダランは、ごくわずかな細部とはいえ重要な意味をもつカステックスの訂正を見逃さなかった。まず1997年刊行のポッシュ版の註でミシェル・クルーゼがこれに触れ、「*inégal*」という語では意味不十分として、カステックスに倣った旨を短く記している³⁾。次いで、2005年に上梓されたプレイアッド版『小説全集』で『赤と黒』の本文を校訂したイヴ・アンセルも、クルーゼと同じくガルニエ新版の改削を妥当なものとして踏襲した。その際にアンセルは、レナール夫人の人物像を定める、「変わることはない優しさ *douceur inaltérable*」をそなえた性格という、カステックスが挙げたのとは別の語句を根拠にくわえている⁴⁾。

しかし他方では、2000年にガリマール社より刊行されたフォリオ版の例もある。アンヌ＝マリ・メナンジエは問題の箇所について初版のテキストに忠実だが、註を付しておらず、その理由は不明である⁵⁾。おそらくメナンジエの判断には、カステックス以前のエディションの歴史、つまり『赤と黒』の著者によるテキストの吟味や没後に出された各版の校訂などを勘案したうえでの慎重な態度を認めることができるかもしれない。というのも、それらを概観するならば、安易には断をくだせない状況が推察されるからである。

スタンダールがどのように『赤と黒』を校正したのかについては、すでに別の場所で論じているので議論を繰り返さないが、我々の見立てでは、いわゆる著者校正は初校だけだったようだ⁶⁾。しかも1830年11月付ルヴァヴァスール宛書簡に明らかなように、第2部末尾の数章にいたっては、作家はその労を版元に委ねてしまっている⁷⁾。このように書簡や備忘からは、入念などとは言い難い校正作業の実態が窺い知れ、カステックスの指摘した誤植が生じる余地は充分にありえよう。しかしながら、小説出版後の再読にもちいられた手沢本への書き込みにあたるならば、来たるべき新版に向け、注意深くテキストを点検するスタンダールの姿が浮かびあがる。

備忘や字句の修正案などのなか、とりわけ目を引くのは、誤植を指摘した次の記述であろう——「第2版には大柄なとある。誰がこの変更をおこなったのか」⁸⁾。スタンダールの驚きは、本来自分が選んだ形容詞は1830年刊行の初版にあるように「小柄な *petit*」という語だったはずなのに、翌年に同じくルヴァヴァスール書店から出た12折判の第2版では、知らない間にそれが「大柄な *grand*」という対義語に置き換えられている事態に気づいたことによる。この書付は第2版の校正に著者自身が関与していないことを教えるが、しかし我々の目下の関心にとって重要なのは、第2部・第5章においてラ・モール侯爵夫人のお気に入りとして名が挙がるラ・ジューマート男爵、けっして短いとは言えない物語中、ここ一箇所だけでしか言及されない、説話論的にも重要度の低い副次的人物に付された形容詞の誤植を、スタンダールが見逃さなかったという事実である。というのも、このように再読において細心の注意力が発揮されたのなら、第1部・第3章のレナール夫人の性格に付された形容詞 «*inégal*» についても、それが誤植であれば目に止まらなかったとは考えにくく、そうすると彼自身はこの語で是としていた蓋然性も否定できないからである。

作家の没後、1846年にエッツェル書店から、ついで1854年にはミシェル・レヴィ書店から『赤と黒』を出版したロマン・コロンの語を訂正していない⁹⁾。後者の扉で「全面改訂した唯一の完全版」と謳っているものの、いずれも学術的な校訂版とは性格を異にし、スタンダールの全幅の信頼を得て『ローマ散歩』などの執筆を助けた腹心ならではの独特な修正が特徴である。コロンは誤植の訂正にとどまらず、近接箇所で繰り返し登場する語を修辭的な観点から類義語に置き換え、文脈に照らして動詞の時制や冠詞、補語人称代名詞などにも手を入れているが、そういった作者目線の恣意的な修正の最たるものは、«*elle jeta un petit cri*» という初版の文を «*elle jeta un grand cri*» と改めた例であろう¹⁰⁾。このような裁量を自らに許したコロンの、件の «*inégal*» という語を不適切だと判断したならば、躊躇せずに訂正したはずだが、そうはしなかったことの意味はけっして小さくない。

1923年にオノレ・シャンピオン書店から出版された『赤と黒』は、『スタンダール全集』のためにジュール・マルサンが編んだ初の学術的な校訂版である。マルサンはコロンのテキストにもあたらただけでなく、ブッチ本と通称される手沢本への作家の書き込みを初めて活字化して採録し、その一部を本文の校

訂に反映させている。おそらくマルサンは、スタンダールが小説を丹念に再読したことに気づいたはずであり、作家が不問に付した部分については初版のテキストを尊重したと推測される。マルサンが「inégal」¹¹⁾ という語をそのままの形で残した背景には、当時の最重要の新資料に導かれた改訂への見通し、すなわち初版と手沢本との照合により著者による点検を十全な形で校訂に反映できうという判断が少なからず働いたと考えられる。

チャンピオン版以後、ガルニエ旧版（1939年）とプレイアッド旧版（1952年）等で『赤と黒』を校訂したアンリ・マルチノは、マルサンの方法を踏襲せず、ブッチ本の書き込みはあくまでも資料として扱い、「著者の生前に上梓された唯一のもの」として初版のテキストを忠実に再現する方針をとった¹²⁾。その際に若干の明白な誤植は正し、先行する死後刊行版とブッチ本の異文は註で示している。このように初版の本文を尊重する姿勢は、カステックス、クルーゼ、アンセルの各校訂版に受け継がれていくことから、マルチノは『赤と黒』校訂版作成の範を示したと言えるであろう。

問題の形容詞「inégal」はというと、マルチノは初版のままである¹³⁾。彼がこの語に疑問を抱いたかどうかは不明だが、いずれにせよ多数の研究書や校訂版にとどまらず、雑誌『ル・ディヴァン』を創刊し、ディヴァン版全集を世に送りだすなど、旺盛な活動によってスタンダール研究を先導し、その礎を確固たるものにした碩学の校訂だけに、慎重な検討の結果と考えるべきであろう。

マルチノの亡き後、20世紀後半のスタンダールの実証研究を牽引した泰斗ヴィクトル・デル・リットは1961年にランコントル社から『赤と黒』の註釈版を出している。彼はコロンやマルサンが改訂した本文を採用せず、そのテキストはマルチノの版に準じたものと思われる。問題の箇所についても後者と同じく「inégal」のままである¹⁴⁾。なお、デル・リットがエルネスト・アブラヴァネルと組んで刊行したビブリオフィル版『スタンダール全集』所収の『赤と黒』（1967年）では、チャンピオン版の本文を復刻しているものの、新たにくわえた後記において、手沢本のヴァリエントを本文に反映したマルサンの校訂を恣意的であると批判している¹⁵⁾。

ガルニエ新版以前の状況をこのように一瞥するならば、カステックスによる訂正が熟慮の末の決断であったことが改めて察せられ、他方ではその訂正を採用しなかったメナンジェのような慎重な選択もありうることが理解されよう。

しかしながら、ここで新たにひとつの疑問が生じる。カステックスは印刷所の植字工の間違いだと見なしたが、じつは彼が提起したのは純然たる解釈の問題だったのではないだろうか。なぜなら、スタンダール、コロン、マルサン、マルチノ、そしてデル・リットのうち誰ひとりとしてその種の誤植と認めなかったという事実を考慮するならば、カステックスによる指摘は、作中人物像の整合性という観点から捉えた作者の誤謬に向けられたものとも考えることもできるからである。

したがって、二通りの読みが想定される。まず初版のテキストに基づくなら、「ひどく内気で、見かけはひどくむらのある性格のレナール夫人」という箇所使用された *«en apparence»* という表現の含みを汲みとることになる。つまり、彼女をあまりよく知らない人間の目にはむら気の多い人柄に映るが、ほんとうはそうではないというように。たしかにこの文だけを読み、含意された真の性格を読み解くことができたなら、なんら違和感を覚えることはないだろう。そういうものとして書かれ、読まれてきた蓋然性は否定できない。

これに対してカステックスは、テキストの他の箇所で言及されるレナール夫人の人物像に照らして文意を再考し、はたして第3者の目に彼女はむら気の多い性格に映りえるのかと問うたのである。校訂上の扱いはともかくとして、我々にはカステックスの指摘は正しいように思われる。とはいえ、それは彼やクルーゼ、アンセルが挙げる理由に充分得心がいったからではない。彼らの論拠以外に、そう判断せざるをえない記述が本文中にやはり見いだされるからだ。たとえば、第1部・第7章には次のようにある――

見かけは申し分なく慇懃で、また良く自分を殺していたので (*Avec l'apparence de la condescendance la plus parfaite et d'une abnégation de volonté*)、そうしたレナール夫人の態度はヴェリエールの亭主連が妻たちに手本として引き合いにだし、またレナール氏の自慢の種でもあったが、実際には平素彼女の心がとる動きは、このうえなく気位の高い性情に由っていた。[35]

人前では腰が低く、自らの欲や感情を一切表にださないレナール夫人の態度は、ヴァルノのような俗物や夫の目にもけっして「むら気の多い性格」とは映らないはずであり、彼女の性格描出における記述の統一という観点に立つならば、*«inégal»* よりも *«égal»* のほうが適切であることは言を俟たない。

しかし、ここで注目に値するのはそれだけではない。非の打ちどころがなく謙譲で自己抑制しているレナール夫人のうわべの姿が、そのじつ努めてそう装われた社交上の態度であって、隠された生来の性格的な本質は「このうえなく高慢な気質 *l'humeur la plus altière*」にほかならぬことが引用箇所にも示されている点もまた《*égal / inégal*》の問題を考えるうえで意義深く思える。というのも、そこにレナール夫人の人物像における表層と深層という構図が読みとれるばかりか、第1部・第3章で《*inégal*》と共にもちいられた《*en apparence*》という語句がそのような2層構造を暗示するべく配されたテーマ論的要素であることが、これによって理解されるからである。

カステックスをはじめ、近年の校訂者ふたりの解釈で納得がいかないのは、彼らがレナール夫人の性格を検討する際に、そのように設定された2重性に言及していない点である。彼らの各々がどのように考えているのかははっきりしないので断定は避けるが、もしかすると外見上のありようを外的にも内的にも一貫した真の性格と見なしているのかも知れない。いずれにせよ、たとえばカステックスが論拠として挙げた、「彼女はけっして不満を口にすることはなかった」という一文にしても、そこに読みとらなければならないのは、夫への従順さのあらわれなどではなく、並外れて高い気位に由来する超然たる態度なのではないだろうか。なぜならば、そうした夫人の内的なあり方が、先に引いた箇所が続けて次のように強調されているからだ——「見た目はかくも優しく慎み深いこの女性〔レナール夫人〕が夫の言動に向ける注意に比べれば、傲慢不遜の例として引き合いにだされる王女でさえ、周囲の貴族たちがすることに対してはるかに気を配っている」[35]。レナール氏に一切不満を漏らさない彼女の態度は強い自尊心に発するのであり、このことについて「心底からの無関心」という性格的特徴において、『リュシアン・ルーヴェン』の女主人公シャストレール夫人との類似を指摘したマルサンの読みはきわめて示唆的であろう¹⁶⁾。なぜなら亭主に対するレナール夫人の無頓着な態度が、スタンダールの存在という次元で考察すべき与件であることが分かるからである。

しかも夫だけではない。レナール夫人は彼女の周囲にいる俗悪な人物たちに対しても普段あまり関心を払っていないことが、同じく第1部・第7章で示されている——

彼女〔レナール夫人〕は繊細で尊大な心を生まれもっているの、運命の采配により卑俗な輩のあいだで暮らしているものの、すべての人間にそなわる幸福追求の本能から、たいいてい彼らの挙動には関心を払わなかった。[35]

ここには、「繊細で尊大な心を生まれもっている Douée d'une âme délicate et dédaigneuse」という表現によって夫人の気位の高さが生得の気性であり、そうした性情ゆえに周りの俗物や社会的な些事は眼中にないという性格上の設定が看取できよう¹⁷⁾。細やかな感受性と誇り高い心を宿し、しかもそれを日常は腰の低い慇懃な態度で包み隠しているという点において、こんどは主人公ジュリアン・ソレルとの意義深い相同性が想起される。レナール夫人が彼だけに心惹かれるのもふたりの高潔な心ゆえの「完全な共感」[36]があればこそだが、性格設定上の両者の共通点についてさらに考察するためには、一連の引用箇所が配された第1部・第7章の章題が、ドイツの文豪ゲーテの小説に借りた「親和力 Les Affinités électives」[33]である点を見過ごすことはできない。

1805年に『若きウェルテルの悩み』に魅了されたスタンダールは、1810年には『親和力』を読み、作者の「偉大な才能」に対する敬服の念を新たにしている¹⁸⁾。そのような彼が『赤と黒』第1部・第7章の章題にゲーテの題名を借用したのは、両小説の表面的な共通項に過ぎない姦通の主題をたんに示すためではあるまい。もちろんヒロインの心中で始まる結晶作用に読者の注意をうながす狙いがあったのであろうが、しかしその心理的な展開は性格上の相似が要因となって一組の男女が惹かれ合うといった単純な構図におさまるものではないことは、すでにアンリ＝フランソワ・アンペールがいみじくも指摘している。彼によれば、スタンダールにとって「親和力」の概念は、ねじ曲がったり古びたりした制度、貪欲な人々、卑俗な関心といった恋愛にそぐわないものすべてを、愛の力とともに描き出すのに優れて有効であったという¹⁹⁾。したがって、レナール夫人とジュリアンに共通する強い自尊心は感じやすい心と相まって、恋愛心理の次元だけでなく、政治的・社会的な次元においても物語の構造化に与っているものであり、ふたりの恋愛との対照において卑俗な人物たちを浮き彫りにする仕組みが『赤と黒』における諷刺の特色をなしているのだ。

一例を挙げよう。第1部・第7章には、ジュリアンの下着が少ないのを知り同情したレナール夫人が、それを彼に贈ろうと夫に打診する挿話がある。青年を知る以前ならこの手の相談ごとで伴侶に反駁されても意に介さなかった彼女

が、このときばかりは夫の了見の狭さに「屈辱を覚えた」[34]とあるように、同情と屈辱との相関が性格設定に即して示されている。さらに先では、夫人が青年の「気高く尊大な心 *âme noble et fière*」[36]に共感を覚え、そう感じることに甘美な喜びを見だしえたのも、「金に目がくらんだ連中に囲まれて暮らさねばならなかったが、長い歳月を経たあとでも、いまだにそうした輩にはなじめずにいた」からだと説明されている。こうした心理分析において誇り高い心と繊細な感受性が、卑俗な人物をいわば触媒にしながらいかに協働しているのかについては、もはや論じるまでもないであろう²⁰⁾。

自分を殺し謙讓きわまる物腰の下には、気高く感じやすい心が隠れているという構図をレナル夫人の人物設定に確認し終えたところで、ふたたび懸案の《*égal / inégal*》の問題に戻ろう。かりに件の箇所を「*égal*」と改めた場合、「一見たいそう落ち着いた性格のレナル夫人」といった意味合いになるが、副詞句《*en apparence*》がある以上、こんどは「内実はむら気の多い性格」という含みが読みとれてしまう。もちろん、これまで研究者たちが彼女にそのような性質を認めてこなかったことは、カステックス等の解釈に明らかであろう。だが、ほんとうにそうであろうか。

この形容詞《*inégal*》が人の内面を形容するのに使われるとき、総じて否定的ないしは軽蔑的な意味合いをもつが、例外がないではない。そうした使用の文学的先例として思い浮かぶのは、シャトーブリアンの『ルネ』である。主人公ルネは長老シャクターズとスーエル神父を相手に自らの生活を出生に遡って回顧し、幼き日の性行を述べる際にこの語をもちいている――

ぼくは母親の命とひきかえにこの世に生まれてきたのです。[…]

ぼくははげしい気性で、移り気でした (*mon caractère inégal*)。陽気に騒いでいるかと思うとおし黙ってふさぎこんでしまい、まわりに若い友達を集めるかと思うといきなりそれをふり捨ててしまい、ひとりはなれた所に行つてすわりこみ、流れゆく雲を眺めたり、木の葉を打つ雨の音に耳を傾けたりしました。²¹⁾

ここで語られるルネの性格は、ごくありふれたむら気の多い人物のそれではなく、生来のあまりにも鋭敏な感受性と、自身の誕生の代償に母の命を奪ってしまった深い悲しみに由来するものであろう。そればかりか、出生から始まる自伝的な語り、そして出産による母の死という説話的要素によって²²⁾、ジャン＝

ジャック・ルソーの『告白』を強く想起させる一節だけに、そうしたルネの「むら気の多い性格」にルソー的な「感じやすい魂 *âme sensible*」との類縁を感じずに物語を読み進むことはむづかしい。それになによりもシャトープリアンその人がルネのような憂鬱で孤独な若者たちを批判するために小説の序文においてルソーとウェルテルの影響に言及しているように²³⁾、両者の類似はあえて意図されたものともとれる。もっとも、今日では序文での非難を額面通りに受けとる者はおらず、ルネに作者の分身を見るのが通例となっていることを踏まえるなら²⁴⁾、「移り気な性格」とそれをもたらした生来の気性はかならずしも否定的な捉える必要はあるまい。むしろシャトープリアンの例では、繊細な感受性はロマン主義の思潮にあって少なからぬ共感を呼んだのであって、感情の起伏の激しい彼の性格は社会における例外的存在の特徴として両義的な価値をもって受け入れられたのである。

スタンダールの文学にも「むら気な性格」をもつ人物がいる。それは未定稿『リュシアン・ルーヴェン』の主人公である――

正直なところ、彼は訪問して半時間を過ぎると、頭に浮かんだことを思いきって口にする場合のほかはほとんどしゃべらず、しゃべってもあまり上手ではなかった。

パリでは反社会的とみなされるこうした習慣は、彼の生涯のこの時期までは隠されていたのだが、それというのも、シャストレル夫人をのぞいて、リュシアンと親しくした人はひとりもいなかったし、彼が訪問を20分以上ながびかせるようなことは一度もなかったからである。[……] 信じられぬほどの努力にもかかわらず、リュシアンは気分の変化をどうしても隠すことができなかった。じっさい、彼ほどむら気な性格もなかった (*il n'y avait pas, au fond, de caractère plus inégal*)。²⁵⁾

一般的な対人関係においては瑕疵ともいえる「むら気な性格」を主人公がそう意識し、社交術によって包み隠そうと努めているにもかかわらず、それをできずにいるという構図は、我々がレナール夫人の人物像に確認したばかりのそれと、表層と深層という二重性において相同であろう。この構図に従えば、彼女はリュシアンとは違い、申し分なく謙譲で慇懃にふるまい、自らの「むら気な性格」を内に秘めていると仮定することも許されるはずだが、さらに注目すべきことに「むら気な性格」そのものが、じつはスタンダールの小説世界では必ずしも否定的な意味に限定されないことが後続部分に読みとれよう――

この悪い性質は、才女の母親から教えられた高雅な礼儀の、このうえなく上品で飾りけない習慣によって、一部分は隠されていたが、かつてはこの性質がシャストレール夫人の目には魅力と映ったのだった。シャストレール夫人は、むらのない性格、こんなにち貴族や富豪における完璧な教育と呼ばれているあの偽善の傑作 […] に慣れていたから、そういうリュシアンのの性質は彼女にとって新しい魅力だったのだ。²⁶⁾

「むらのない性格 *égalité de caractère*」が実際には洗練された社交術の結果であり、「偽善の傑作 *chef-d'œuvre de cette hypocrisie*」にほかならず、シャストレール夫人がリュシアンの「むら気な性格」に惹かれたのは、社交界に蔓延るそうした偽善と対極をなす「自然らしさ」のあらわれとして彼女の目に映ったからであろう。このような肯定的な側面を踏まえるならば、レナール夫人にも「むら気な性格」があると想定したとしても、読みとしてはあながち不適切とはいえない。

ただしリュシアンとシャストレール夫人の例に窺い知れるように、レナール夫人の「むら気な性格」が表に現れるのは心を許した相手に対してだけであり、そもそもスタンダールのいう「むら気」とは、「感じやすい心」が不意にみせる感情の起伏のことではないだろうか。もしそうならば、たとえば次の箇所にレナール夫人のそのような心の動きを認めることができよう――

聡すぎる子供たちがそばにいて、よそよそしく理性的にしか話ができないときには、ジュリアンは恋心で目を輝かせながら夫人を見つめ、世の中の仕組みを説明する彼女の言葉に耳を傾けたが、その様子はじつに従順だった。道路工事や物資調達の際に抜け目なく仕組まれる詐欺などの話のさなか、とつぜんレナール夫人の心が乱れ、逆上してしまうことがたびたびあった (*l'esprit de M^{me} de Rênal s'égarait tout à coup jusqu'au délire*)。ジュリアンが夫人をたしなめずにはいられなくなると、彼女のほうでは彼に向かって子供たちにするよううち解けた仕草をみせるのだった。[92]

繊細で感じやすいレナール夫人は、心を開いた人々の前ではこのように予期せぬ激しい言動でしばしば相手を驚かす。だが、誇り高い彼女は軽蔑する俗物の前では心を固く閉ざし、礼儀作法という鎧を身にまとうのだろう。その姿を端から見れば、「ひどく内気で、見かけはとても落ち着いた性格」と映るのではないだろうか。

ところで、レナール夫人のむら気な性格はどこから来たのだろうか。モデル

や着想源については諸説あるものの²⁷⁾、この性格的な特徴だけに限定するならば、思い浮かぶのは作者スタンダールである。というのは、別の観点からではあるが、ヴィクトル・ブロンベールが件のリュシアンを最も作者に似た人物と示唆しているためだ²⁸⁾。そうだとすれば、作家が創りだした主人公のうち、自らをモデルにして造型したとされる『社会的地位』の主人公ロアザンも同じく考察する必要があるだろう。両者の強い類似性については、この未定稿を「自伝の逐語訳」と呼んだモーリス・バルデッシュから最新の校訂者フィリップ・ベルティエにいたるまで異口同音に認めているだけに²⁹⁾、同作にもレナール夫人の性格の源泉について確かめる手がかりがあるのではないかと――

ロアザン氏。一見このうえなくむら気な性格で、ときには耳にしたただひとことで涙がでるほど感動する。べつのときには、感動しはすまいか、あとで弱虫だと自分を軽蔑することになりはすまいかと恐れて、皮肉になり、非情になる〔…〕。³⁰⁾

草稿の余白、引用箇所のおそばには、「一言でいえば、ロアザンは理想化されたドミニック〔スタンダールの偽名〕である」³¹⁾と記されているように、ここに示された性格的な特徴は作者自身から写しとられたと考えて間違いあるまい。「一見このうえなくむら気な性格」という表現で暗示されているのは、否定的な意味での「むら気」ではなく、やはり俗世では周囲の人々の理解が得にくい〈感じやすい魂〉の見せる一側面であろう。引用した一節のすこし先には、「心を打つひとこと、街で耳にしたり、職人の店で通りすがりに出くわしたりした不幸の嘘偽りのない表現に、彼は涙が出るほど心を動かされるのだった」³²⁾とあるように、不幸せな他者に対するシンパシーの働きは機敏で深く、その振幅の大ききゆえに傍目には自らが「一見このうえなくむら気な性格」と映りうることをスタンダールは自覚し、それをロアザンに貶下的に投影しているのである。レナール夫人もまた同様の鋭敏な感受性を共有している。彼女の人物像が説明される『赤と黒』第1部・第7章に限っても、ジュリアンの貧しさに同情し涙ぐむ姿や、往来で轢死した犬に寄せる憐憫などがその例証となろう。

したがって、かかるレナール夫人の性格的な特徴はリュシアンやロアザンと同じく、スタンダール自身に起源をもつといえようが、さらに『社会的地位』からの引用で興味深いのは、ロアザンの性格を説明する文言「一見このうえなくむら気な性格 *caractère en apparence le plus changeant*」が、『赤と黒』の

問題の表現、すなわち「見かけはひどくむらのある性格 *caractère en apparence fort inégal*」と意味的にはほとんど異ならない点である。このことから察せられるのは、「*inégal*」は誤植ではなく、レナール夫人の感じやすい性格を仄めかすために³³⁾、まさしくこの語が選ばれた蓋然性ではないだろうか。しかも『赤と黒』の問題の一文全体も、あまりにも感じやすい夫人は、ヴァルノ氏のじっとせず落ち着きのない態度とやかましい話し声に気分を害したと解するのなら、文脈の点でもまったく齟齬はない³⁴⁾。このようなスタンダール特有の用語法を考慮するならば、もはや「*inégal*」を誤植とすることはきわめてむづかしい。

結論がでたかのようにも思えるが、そうではない。たしかに誤植ではないにせよ、すでに確認したように「見かけはひどくむらのある性格」という文言が、テキストの諸処で示されるレナール夫人の性格的特徴や人物設定と相容れないことに変わりはないからである。それに、どれほどの読者が、スタンダール独特の両義的な意味を「*inégal*」の語に見抜くことができるだろうか。いまや我々が直面しているのは、校訂のアポリアにほかならない。すなわち、作者の考えを尊重し、初版の本文の表現を採るのか、解釈によって導きだされる人物像の整合性を重視してそれを訂正するのか、最終的には個々の校訂者の判断に委ねられよう。我々がカステックスの校訂もまた是とする所以である。

*

蛇足となるが、受容の観点から一瞥しておこう。カステックス以前と以後で校訂のあり方は区切られるのだが、一般社会の読書状況は必ずしもこれに対応していない。ガルニエ新版やプレイアッド新版のいずれもが学術的校訂版であるため、普通の読者は手を伸ばしにくく、1997年のクルーゼによるポッシュ版が刊行されるまで、大半の人々は問題の箇所「*inégal*」と刷られたテキストに親しんできたはずである。とはいえ、同版の登場によって状況が一変したわけではなく、2000年のフォリオ版でメナンジェがマルサンの本文を採用したほか、各社の普及版も軒並み初版の表現に忠実であることから³⁵⁾、カステックスが提起した訂正を知る一般読者の数は実際にはさほど多くはあるまい。

我が国における翻訳の状況に目を移すと、現在新本で入手可能な『赤と黒』

の邦訳に話を限るならば、いずれの訳者も名うての仏文学者であり、底本には学術的な校訂版を選んでいるので訳文には研究の知見が反映され、問題の箇所については底本の選択によって相違が生じている。新潮社、岩波書店、中央公論社では「*inégal*」、他方、集英社と光文社が「*égal*」の訳語となっている³⁶⁾。それぞれの累計の発行部数について確かなことは分らないが、日本の読者がカステックスの訂正を介してレナール夫人像を思い描く機会は、フランスよりも多そうである。

興味深いのは、古屋健三による翻訳である。1971年に大岡昇平との共訳で講談社の『世界文学全集』第4巻として上梓された訳書では、第1部を担当した大岡が「レナール夫人は非常に内気で、見るからにひどく気分の動きやすい性質だったから」と訳をつけたのに対して³⁷⁾、1977年の学習研究社『世界文学全集』に収められた古屋の個人訳では、「レナール夫人はとても内気で、見たところおとなしい性格だったから」と訳語を改めている³⁸⁾。どちらの底本もマルチノ校訂のガルニエ旧版であることから、古屋は新たに第1部を訳す際に、集英社で佐藤朔との共訳にもちいたガルニエ新版にも丁寧にあたりながら、訳文を整えたのではないかとと思われる。細部にも目の行きとどいた入念な仕事だけに、今日この翻訳が絶版になっていることが惜しまれてならない。

註

*) 本稿は「JSPS 科研費：課題番号 16K02537」の助成を受けた研究の一部である。

- 1) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, par M. de STENDHAL, Paris : Libr. Levasseur, 2 vol., 1831 [1830], t. I, p. 21.
- 2) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Texte établi avec sommaire biographique, introduction, bibliographie, variantes, notes et dossier documentaire par Pierre-Georges CASTEX, Paris : Éd. Garnier Frères, coll. « Classiques Garnier », 1973, pp. 13 et 524n. 以下、『赤と黒』からの訳出・引用の底本には同版を使用し、出典の頁数は〔 〕内に示す。同一頁からの引用が連続する場合には、最初の引用にのみ出典を付す。
- 3) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique de 1830*. Préface, commentaires et notes de Michel CROUZET, Paris : Libr. Générale Française, coll. « Livre de poche », 1997, p. 23n.
- 4) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, in *Œuvres romanesques*

- complètes*. Préface de Philippe BERTHIER. Édition établie par Yves ANSEL et Ph. BERTHIER, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 3 vol., 2005-14, t. I, [2005], p. 1004n.
- 5) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*. Préface de Jean PRÉVOST. Édition établie et annotée par Anne-Marie MEININGER, Paris : Gallimard, coll. «Folio classique», 2000, p. 58.
 - 6) スタンダールがどのように『赤と黒』を校正したかについては次の拙論を参照—— Nobuhiro TAKAKI, «De la source au texte. Un aspect de la création dans *Le Rouge et le Noir*», *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, n^{os} 9-10, septembre 2007, pp. 139-141.
 - 7) STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E SLATKINE, Paris : Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-1999, t. 3, [1999], p. 784.
 - 8) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*. Texte établi et annoté avec introduction historique par Jules MARSAN. Préface de Paul BOURGET, 2 vol., in *Œuvres complètes*, publiées sous la direction d'Édouard CHAMPION et de Paul ARBELET, Paris : Libr. Honoré Champion, 33 vol., 1913-34, t. II, [1923], pp. 66 et 564-565n.
 - 9) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, in *Œuvres de Stendhal*, Paris : J. Hetzel, 1846, p. 13 ; STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Seule édition complète entièrement revue et corrigée, in *Œuvres complètes de Stendhal*, Paris : 18 vol., 1853-55, [1854], p. 12.
 - 10) これについては次の拙論を参照—— Nobuhiro TAKAKI, «Texte et variantes : au sujet du texte de base de l'édition Hetzel du *Rouge et le Noir*», *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, n^o 17, janvier 2013, pp. 297-309.
 - 11) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* (Champion), *op. cit.*, t. I, p. 23.
 - 12) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Texte établi avec introduction, bibliographie, chronologie, notes et variantes par Henri MARTINEAU, Paris : Éd. Garnier Frères, coll. «Classiques Garnier», 1961, p. XXXI.
 - 13) Voir *ibid.*, p. 14.
 - 14) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*. Préface et notes de Victor DEL LITTO, in *Œuvres de Stendhal*. Collection publiée sous la direction de V. DEL LITTO et d'Ernest ABAVANEL, Lausanne : Éd. Rencontre, 18 vol., 1960-62, t. VII, [1961], p. 43 ; voir aussi *Le Rouge et le Noir*. Introduction et commentaires de Victor DEL LITTO, Paris : Libr. Générale Française, coll. «Livres de poche», 1972, p. 19.
 - 15) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*. Texte établi et annoté avec introduction historique par Jules MARSAN. Préface de Paul BOURGET. Postface de Victor DEL LITTO, 2 vol., in *Œuvres complètes*. Nouvelle édition établie sous la direction de V. DEL LITTO et d'Ernest ABAVANEL, Genève : Cercle du Bibliophile, 50 vol.,

- 1967-74, t. II, [1967], pp. 632-633.
- 16) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* (Champion), *op. cit.*, t. I, pp. 24 et 394n.
 - 17) レナール夫人の強い自尊心と社会的現実に対する無関心との相関については次を参照—— Voir Michel CROUZET, «Introduction», in STENDHAL, *Le Rouge et le Noir* (Générale Française), *op. cit.*, p. XXXVIII.
 - 18) Voir Victor DEL LITTO, *La Vie intellectuelle de Stendhal. Genèse et évolution de ses idées (1802-1821)*, Paris : PUF, 1959, pp. 181-183, 328-329 et 420-421.
 - 19) Voir Henri-François IMBERT, *Variétés Beylistes*, Paris : Libr. Honoré Champion, 1995, p. 146.
 - 20) 付言するならば、ここでスタンダールはレナール氏を「守銭奴」というような人間の普遍的性格をあらわす人物として扱っているのではない。王政復古期の反動的な政治・社会情勢下にありながら著しくブルジョワ化の度合いを増した地方貴族という、まったく新しい典型をレナール氏は体現しており、ラ・モール侯爵を始めとするパリの洗練された貴族との対比において時代の様相をいっそう巧みに伝える写実主義的な人物形象として配されているのである。
 - 21) Voir CHATEAUBRIAND, *René*, in *Œuvres romanesques et voyages*. Texte établi, présenté et annoté par Maurice REGARD, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2005, p. 119. なお引用には次の邦訳を使用——シャトーブリアン『アタラ・ルネ』(辻昶訳), 旺文社文庫, 1976年, 128頁。
 - 22) Voir *ibid.*, p. 1201n. モーリス・ルガールは出産による母の死という細部にルソーとの関連を指摘している。
 - 23) Voir *ibid.*, p. 114.
 - 24) Voir *ibid.*, pp. 103-105.
 - 25) STENDHAL, *Lucien Leuwen*. Texte établi, présenté et annoté par Y. ANSEL et Xavier BOURDENET, in *Œuvres romanesques complètes*, *op. cit.*, t. II, [2007], p. 689. 引用箇所の邦訳は、『リュシアン・ルーヴェン II』(『スタンダール全集』所収, 島田尚一・鳴岩宗三訳), 人文書院, 1977年, 第4巻による。
 - 26) *Ibid.*, pp. 689-690.
 - 27) レナール夫人のモデルについては次を参照——松原雅典『スタンダール 愛の祝祭——『赤と黒』をつくった女たち』, みすず書房, 1994年, 9-12頁。
 - 28) Voir Victor BROMBERT, *Stendhal et la voie oblique. L'Auteur devant son monde romanesque*, Paris : PUF, 1954, p. 71.
 - 29) Voir Maurice BARDÈCHE, *Stendhal romancier*, Paris : La Table Ronde, 1947, p. 240 ; voir également Philippe BERTHIER, «Notice» pour *Une position sociale*. Texte établi, présenté et annoté par Ph. BERTHIER, in STENDHAL, *Œuvres romanesques complètes*, *op. cit.*, t. II, [2007], p. 1182.
 - 30) *Ibid.*, p. 46. 『社会的地位』の訳出・引用には, 前掲『スタンダール全集』第4巻所収(島田尚一訳)の邦訳を参照したが, フリップ・ベルティエ校訂のテキストにも

とづき改変した箇所がある。なお、ここで示されているロアザンの感動することへの自制は、リュシアンにも共通している (voir BROMBERT, *op. cit.*, p. 75)。

- 31) STENDHAL, *Une position sociale*, *op. cit.*, p. 1188n.
- 32) *Ibid.*, p. 47.
- 33) ジョルジュ・ブランの解釈に従うならば、この箇所ですでに語りは客観的・普遍的なものになっていると見なせよう (voir Georges BLIN, *Stendhal et le problème du roman*, Paris : José Corti, 1954 [1990], p. 149n)。そのような叙述の性質に照らしても、「*inégal*」の選択は妥当性を欠くとはいえない。
- 34) この種の感じやすさの例は『エゴチスムの回想』にも見られる。Voir STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981-82, t. II, p. 486.
- 35) Voir STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Préface et commentaires de Pierre-Louis REY, Paris : Pocket, coll. «Pocket Classiques», 1990, p. 33 ; STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Édition présentée, annotée et commentée par Catherine de LA HOSSERAYE, Paris : Larousse, coll. «Petits Classiques Larousse», 2001, p. 21 ; STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique de 1830*. Notes et dossier par Olivier BARA, Paris : Hatier, coll. «Classiques & Cie», 2004, p. 24.
- 36) 刊行年の古いものから挙げていくと——スタンダール『赤と黒』(上下巻, 小林正訳), 新潮文庫, 1957年 [2012年], 26頁 ; スタンダール『赤と黒』(上下巻, 桑原武夫・生島遼一訳), 岩波文庫, 1958年 [2007年], 40頁 ; スタンダール『赤と黒』(「集英社ギャラリー〈世界の文学〉6」, 『フランス I』所収, 佐藤朔訳), 集英社, 1990年, 387頁 ; スタンダール『赤と黒』(「世界の文学セレクション36」, 富永明夫訳), 中央公論社, 1993年, 18頁 ; スタンダール『赤と黒』(上下巻, 野崎歓訳), 光文社古典新訳文庫, 2007年, 32頁。
- 37) スタンダール『赤と黒』(『世界文学全集』第4巻, 大岡昇平・古屋健三訳), 講談社, 1971年, 14頁。
- 38) スタンダール『赤と黒』(『世界文学全集』第13巻, 『スタンダール』所収, 古屋健三訳), 学習研究社, 1977年, 63頁。